

高天原(たかあまはら)の神々の御宣託 その一:高原山の神仏申す

和氣達郎(高原山神社宮司) + 高原山の自然を守る会(編集協力)

2014(平成26)年7月30日、栃木県塩谷町が指定廃棄物の最終処分場候補地となったことが、唐突ともいえる方法で環境省から塩谷町長に伝えられた。ここでいう指定廃棄物とは、2011年の東日本大震災以降、現在に至るまで日本社会を悩ませ続ける放射能を含む廃棄物のことである。しかもその廃棄物の処分

場候補地は、あろうことか美しい山容を誇る高原嶺(たかはらね)の山腹に位置するという。

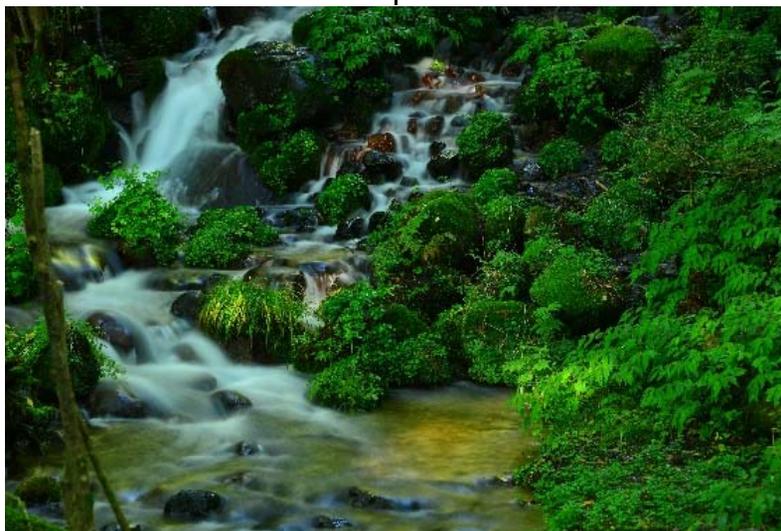
高原嶺とは、登山愛好家には三百名山の一つとして知られる釈迦ヶ岳や、スキー場で有名な鶏頂山などから構成される高原連峰のことである。



【写真1: 田植えを終えた初夏と実りの秋を迎えた高原山と塩谷の田園風景】

「高原山(たかはらやま)」と呼び習わしてきた塩谷町民にとって、この高原嶺は四季の移ろいや一日の時間の流れを知らせてくれる身近な存在であり、豊かな自然の恵みを与えてくれる生活の基盤でも

ある。全国名水百選として認定を受けている「尚仁沢(しょうじんざわ)湧水群」の水源を抱く連峰であることを知っている人ならば、その自然の恩恵がいかほどのものかはお理解いただいているだろう。



【写真2: 緑の映える初夏の尚仁沢の水流】



【写真 4: 秋を迎える山の神神社と、登山道の途中にある弁天池とその畔にある祠】

事実、古くは奈良時代より、高原山は東房と西房を備えた参詣道をもつ、山岳信仰の山として栄えていた。女帝である第 44 代元正天皇[在靈龜元(715)年～養老 8(724)年]は、養老 4(720)年に、大將軍藤原房前(ふささき)に勅を發して、奥夷に近い高原山で「鬼人退治」の祈願をしたという伝承が残されている。次の第 45 代聖武天皇[在神龜元(724)年～天

平勝宝元(749)年]の時代、一説には鬼人退治を行った先の房前の助言もあつて、釈迦ヶ岳に祠(明治の神仏分離以降、現在の高原山神社となる)と剣ヶ峰に法樂寺(803 年焼失、その後移築されて現矢板市の寺山観音に連なる)が著名な高僧行基[天平 21(749)年没]によって建立されている。



【写真 4: 高原山頂の高原山神社と、恒例の山開きの様子】

天平 13(741)年、聖武天皇の詔によって全国 60 数か所に建てられた寺院の一つに当たる下野国分寺(現下野市の「下野国分寺跡」)は、塩谷町の南東方向約 30km に位置し、都とこれら各地の国府と

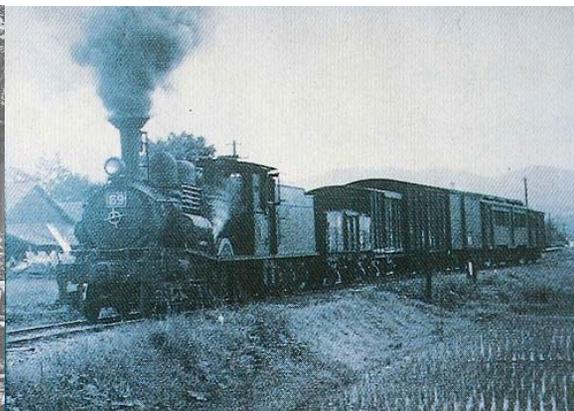
国分寺を結ぶ東山道を通じて、往時の塩谷の山村にも仏教文化が流入し、人々の生活に深く浸透していったことだろう。



【写真 5: 弘仁元(810)年創始と伝えられる船生地区の岩戸別神社(休日画人 澤田茂氏提供)】

「開山の謂われ」として、行基などのような著名な人物との縁を伝える伝承は各地で多く見られるが、このときの行基の塩谷来訪は、布教はもとより奈良東大寺造営に必要とされる金や銅の採鉱調査が目的だったとも考えられているようだ。江戸前期の寛文 9 (1669)年には、寺島金山の開発が史実とし

て記録に残されているが、それよりも古い時代から、鉱山開発は高原山周辺の地域で行われていたようである。実際に、高原山の一部には、金属鉱物を豊富に含む岩石地帯が広がっている。明治時代から昭和 40 年代まで、塩谷町には 18 に及ぶ鉱山が操業していたのだった。(続く)



【写真 5: 高原山の恵みを受け、林業や鉱業で賑わう塩谷町の昭和 40 年代の風景。馬車を用いた木材運搬は昭和 50 年代に姿を消した。盛期には 400 人が働いていた日光鉱山は昭和 50 年に閉山した。矢板(旧国鉄東北本線、現 JR 東北本線「矢板駅」と高德(現東武鉄道鬼怒川線「新高徳駅」、前身は下野電気軌道)をつないだ「矢板線」を走る蒸気機関車は、木材や鉱物資源の輸送を担い、地域住民の足でもあった。(『塩谷町'95 町制施行 30 周年記念要覧』p.15.17 より)】。